第１０７回日本陸上競技選手権大会報告（全国競技運営責任者会議）

大阪陸上競技協会

１．大会についての概要

○開催日【６／１（木）～４（日）】国際大会の開催期日の関係で、昨年より１週間早い日程となった。本年もＵ２０との同時に開催となり、４日間開催となった。また、本年も最終日にオープン競技として小学生・マスターズ・パラリレー・デフの種目を実施した。

○自己記録

男子３６、女子３０、Ｕ２０では男子４１、女子３７の自己記録がでた。

○大会記録

男子 800m、男子 1500m、男子 110mＨ、女子三段跳の４種目で６つ樹立された。

○日本記録

男子 110mＨと女子三段跳の２種目で日本記録が樹立された。

○ブダペスト世界陸上内定

今大会で新たに男子３名が内定。

○観客数

・１日目（3443 人）２日目（1666 人）３日目（4040 人）４日目（7814 人）　合計（16,963 人）
※新規入場者のみ（参加チームＡＤ入場・関係者除く）の数、昨年は 11,812 人

・６／１（木）近隣３小学校５６１名を会場に招待

○視聴率

6/1（木）	ＢＳ１	18：00～19：50	0.8%（ＢＳは×７すると地上波の感覚値）
6/2（金）	総合	19：30～20：42	7.7%
6/3（土）	総合	16：30～18：43	4.8%
6/4（日）	総合	16：30～18：43	6.3%

２．競技運営等にかんして

・ＪＴＯの指導の下、２日目の悪天候での競技日程の変更以外は、大きなトラブルなく実施できた。

・２日目（６／２（金））悪天候により、跳躍種目はすべて３日目に、投てき種目はＵ２０の男子円盤投と女子やり投の２種目を３日目に順延した。
審判員及び補助員を急遽増員し、実施することができた。（役員係及び審判員の連携により実現）

・３日目、練習会場のヤンマーフィールド長居でＵ２０の投てき種目の競技を実施した為、投てき審判員・練習場係・選手には負担をかけた。

・女子 100mH 決勝において、ライブリザルトの際に４位の選手を１位と表示した（判定中のものが瞬時に電光に表示されるシステムであった）。誤りに気付いた電光係が、すぐに画面を切り替え、１５秒後に正しい結果を表示した。世界陸上の代表を決めるレースであった為、メディアにも取り上げられる事象となった。ライブリザルトの表示は選手や観客の為に推奨されているため、本大会においてもこの方針で運用していた。関係部署（総務・進行・アナウンス・電光等）との連携、対応方法の検討を重ねる。

・トラック進行に関して、シニア種目の予選等において４組以上の場合は、招集を２組ずつ分けていたが、３組から分けた方が良いと思われる。（１レース７～１０分間隔で実施されるので、３組目は現地で２０分近く待機することになる為。）

・Ｕ２０との同時開催については、競技日程の問題やＵ２０の開催時期の問題、4 日間開催による審判員の負担の問題等の意見を多数聞く。３年を終えた段階で、課題を整理していただき。Ｕ２０の選手にとって一番よい大会を考えていただきたい。

３．抗議（質問）等にかんして

・質問（ビデオ確認）は２件あったが、抗議はなかった。

令和６年２月１２日（月）

第１０７回日本陸上競技選手権大会・混成競技　報告

（一財）秋田陸上競技協会

１　はじめに

前年度の第１０６回大会では、日本陸上競技連盟や長野陸上競技協会を始めとした多くの方々のお力添えのおかげで、大きなトラブルもなく競技を運営することができました。改めて感謝申し上げます。

ところで、前回大会で浮き彫りになった課題は数多くありました。「大型スクリーンの未設置」、「ADカードでの規制方法」、「EDM の動作確認」、「審判員の不足」、「補助員への指示」など、１年間という限られた時間の中では十分な準備ができないものもありましたが、秋田陸上競技協会は最善の努力を重ねて第１０７回大会までの１年間準備を進めて参りました。

２　大会概要

期日：２０２３年6月１０日（土）～１１日（日）

会場：秋田県営陸上競技場

３　問題となった事案とその対応及び解決方法

【事案①】選手が控え室に置いてある荷物から新たに取り出した衣類に、商標規定に抵触するものが複数あった。 【対応等】競技者係を中心に全審判員でその都度確認しマスキングの対応をした。全ての衣類をチェックすることは簡単ではないが、控え室に商標規定に関する注意の張り紙を掲示するなどして、選手に意識してもらうべきだった。
【事案②】特に跳躍審判員の不足が顕著だった。競技の準備作業に追われ、打ち合わせや審判員の掌握が十分にできない状況が続いた。また、種目別表彰の誘導を怠ってしまった。 【対応等】急遽、投擲審判員が跳躍種目の光波測定、記録情報員が跳躍種目の記録入力といった審判業務を行った。種目の垣根を越えた審判編成をして備えるべきだった。
【事案③】前回大会と同様、会場に大型スクリーンがなく、スタンド中央付近の大型時計も故障したままの状態。そのため、選手が時間を確認するための時計が会場になかった。 【対応等】秋田県高体連陸上競技専門部が駅伝競走で使用している電波時計を複数個借りて、大会２日目は選手控え室等に設置した。
【事案④】盗撮行為が疑われる事案が３件ほど発生した。 【対応等】事前の対策として「撮影禁止エリアの指定」、「１００ｍスタート位置後方へのパーティションの設置」、「アナウンスでの呼びかけ」、「警備員の巡回」を行っていた。今回、盗撮が疑われた観客の中の１名には事務室まで同行してもらい、総務員が確認しながら撮影した画像を削除してもらった。

【事案⑤】Ｕ２０七種の走幅跳の競技中、ある選手のコーチが JT0 に対して「日本選手権のような大会で高校生（競技スタッフ）がタイマーの操作を行ってよいのか。試技時間切れの際はどのように対応するのか。」と見解を求めた。 【対応等】JT0 から「高校生をタイマーのランプがよく見える位置に座らせる」、「主審にタイマーと踏切をよく観察してもらう」、「その様子を審判長がよく監察する」という具体的な対応策を回答して頂き、現場ですぐに実行した。
【事案⑥】監察員が使用する撮影用タブレットの機能面に問題があった。タブレットの容量が２０ＧＢしかなく、その都度ＰＣへデータを移していた。 【対応等】ＳＤカードを準備して１日の競技分は保存したままでも大丈夫な準備をすべきだった。また、ズームで撮影すると試技の様子や痕跡が鮮明な映像として残るようなタブレットでなければいけないことも担当者間で確認した。
【事案⑦】日本選手権十種、最終種目の１５００ｍが１時間ほど遅れてのスタートとなった。 【対応等】原因の１つとして、Ｕ２０十種の棒高跳を２ピットで終えた後に、日本選手権十種の棒高跳を実施した競技日程が考えられる。棒高跳は、それぞれ１ピットで運営したほうがスムーズに流れたと思われる。
【事案⑧】日本選手権十種の１５００ｍで観客がグラウンドに降りて９レーンより外側から応援できる形で競技を行ったのだが、ある選手のコーチが６～７レーンに入って応援していた。 【対応等】一体感を得られるような工夫をしたときほど、監察員の数を十分に確保するなどして競技者に不利益が生じないような運営をすべきだった。

※参考資料

「第１０７回日本陸上競技選手権大会・混成競技　JT0 報告書」　JT0　赤峰　俊彦、中村　紗奈江

「主任審判会議資料」

4　その他

【アジア陸連５０周年記念イベント】 ・記念イベントとして、バトンリレーが大会２日目の午後に行われた。 【中村明彦選手（スズキ）の引退セレモニー】 ・日本選手権十種の１５００ｍ終了後、観客がトラックにいる状態でセレモニーが行われた。 【EPM の関わり】 ・場面に応じて秋田県に関係する音楽の使用や、競技者の年代を意識した選曲等を心掛けた。

5　おわりに

施設設備の改善や審判員の確保といった課題を大きく改善できないまま第１０７回大会を迎える形となりましたが、その分、秋田陸上競技協会員一同、誠実な運営と正確な審判業務の遂行を心掛けて大会に臨みました。

関係の皆様からのご指導、ご支援、ご協力に深く感謝申し上げます。

文責：（一財）秋田陸上競技協会
競技委員長　　櫻田　文人

令和５年度全国高等学校総合体育大会陸上競技大会
秩父宮賜杯第 76 回全国高等学校陸上競技対校選手権大会　報告

一般財団法人北海道陸上競技協会
審判委員会委員長　玉井 康夫

１．期　　日　　令和５年８月２日（水）～６日（日）
２．会　　場　　札幌市厚別公園競技場
３．はじめに

36 年ぶりの北海道開催となったインターハイは、競技場も 36 年前と同様の老朽化した施設に、暑さ対策となる体育館やエアコン装備の部屋もなく、さらにテントスペースや駐車場も数が限られており、選手や監督、高体連、日本陸連の方々には相当なご不便をおかけしたことと思います。また、競技役員・審判も 36 年前のインターハイに関わった経験者が少なく、各視察会場、プレ大会、本大会に至るまで日本陸連役員並びに JTO の方々には何度もご指導いただき、幾つかのトラブルはあったものの、大過なく無事大会を終了することができました。心より感謝申し上げます。

４．発生した問題点とその対処

（１）事例１…男子 3000mSC・１組目。スタート後の第１障害で、先頭の選手が障害直前で足が合わず体で激突。障害が倒れ、すでに跳ぶ動作に入っていた選手達は転倒した。後続の選手達は一度立ち止まり、その後倒れたままの障害を越えてレースに戻った。トラック審判長がレースを中止するように大きな声をかけたが、その声が選手達に届いたのはスタートから 300m 程進んだ最初の水壕付近だった。トラック審判長は、①「選手全員が障害を越えていないので記録が公認されないこと」、②「転倒により怪我をしていると思われる複数の選手もレースを継続していたこと」から選手の安全面を考慮してレース中止の判断をとった。大会本部と協議の上、４組目終了後に再レースを実施することとした。

◎抗議・上訴

顧　問：「巻き添えになり怪我をして医務室に運ばれた。再レースが行われたが出られる状態ではなく再レースを辞退した。選手本人にレース辞退の責任はないので救済してほしい。」【抗議】

審判長：「同選手は再レース出場を迷っており、ギリギリまで判断を待ったが、結果的に自分の意思で出場を取りやめたので、救済には該当しない。」【審判長判定】

顧　問：上訴申立書提出「3000mSC１組、第１障害でのハードルが倒れたために怪我をした。他の選手が倒したハードルにより負傷し、再レースに出場できる状況ではなかった。救済をお願いして決勝に出場させてほしい。」【上訴】

※ジュリー（５名）を別室に案内し、抗議担当総務員より上訴内容と審判長判断の根拠を説明。ビデオ監察の映像を確認してもらい、５名での話し合いに入ってもらった。

ジュリー：「ジュリーの裁定が出ました。裁定　審判長の裁定を支持する。」【ジュリー裁定】

（２）事例２…女子７種競技・砲丸投（３種目目）。３種目目終了後、審判員の指示により次の種目の招集を考慮して、混成選手控室に５名ずつの選手が戻された。

顧　問：「早めに戻された選手と最後に戻された選手とでは差が出るのではないか？」【質問】

審判長：「砲丸投は 45 分遅れてスタートした。次の種目の準備を速やかに行えるように、砲丸投終了の選手は５人ずつ戻した。２種目目の走高跳の際にも高さごとに帰しているので、同様の対応と考えている。」【返答】

顧　問：「砲丸が終わってもリレー決勝の関係ですぐに戻れなかった。同じチームで早くアップできる者と、できない者がいる。アップできない者は怪我をしてしまう。」【再質問】

審判長：「ルール通り 30 分の間をあけているので、予定通り行くことになる。」【返答】

顧　問：「競技開始時間が迫り、選手の状態も見たいので戻るが、せめて 200m のスタート前に体を動かせる時間を作ってほしい。」【要望】

審判長：「要望として承る」【返答】

（３）事例３…男子４×400mR 予選４組目。第４コーナー付近で３走の選手が後方から抜いてきた選手と接触し、飛ばされるようにフィールド内に倒れこみ、そこでうずくまったままレースを中止した。

顧　問：「後方から抜いていく選手に肩をぶつけられ転倒した。救済してほしい。」【抗議】

担当総務：「審判長はレースの流れの中で起きた不可抗力事案なので救済の対象にはならないと判断した。」【審判長判断伝達】

顧　問：「私も何度も審判長の経験があるが、このケースは救済に当たるはずだ。」【抗議】

地区監督：「こんなに飛ばされているのだから、激しい接触があったに違いない。」【抗議】

その後、納得できない顧問は、審判長から直接話を聞きたいと申し出。審判長がそれを受け、顧問に直接会って判断の根拠を説明。その後持ち込みビデオを審判長が確認し、次にビデオ監察の映像を顧問や地区監督に確認してもらった。レースの流れでの不可抗力の接触と判断した旨をあらためて説明。また、審判長はその選手の元へ行き、状態を確認したがレース続行できる精神状態ではなかったことも説明し納得して引き取ってもらう。

（４）事例４…女子 1500m 予選４組目。「On your marks」後、突風によりＢゾーン（水壕付近）に設置してあったハンマー投用の LED 表示盤が倒れ１レーンを塞いだ。

⇒ レースはスタートし、気づいた投擲審判員がすぐに駆け寄り数名で表示盤を起こしてフィールド内に移動し、レースに支障はなし。その間およそ 10 秒。

（５）事例５…混成競技・走高跳。ラウンドの中で試技を行う選手が３名（パスしている選手を失念）になり、フィールドタイマーを１分 30 秒に変更し競技が行われようとした。

⇒　JTO が気づいて審判長・主任に連絡。すぐに１分に戻して競技が行われた。試技時間のルール確認をあらためて主任を中心に行った。

（６）事例６…短距離種目。「On your marks」の後にフットプレートに足が接触していない事案が多数あり、その都度スタートのやり直しが行われた。（ピクつきでのやり直しと合わせて YC が提示されるケースが２件あった）

⇒ 大会後半は事前に出発係よりフットプレートへの接触に注意するようにアナウンスした。

（７）事例７…女子棒高跳。Ａピットの踏切位置がＢピットのマットの陰になりコーチ席から見えないので改善してほしいとの監督からの声が現場であった。

⇒ 練習時は両ピット審判員が踏切位置を選手に直接伝える措置をとった。試技はルール通り実施した。（厚別公園競技場のレイアウト上、他競技との兼ね合いにより棒高跳２ピット実施の際は避けられない状況であった。）

（８）事例８…男子 3000mSC２組目。ラスト 500m のホームストレートを走る選手が意識朦朧となり、ふらつき倒れそうになっていた。

⇒ 主催者判断として JTO がその選手のレースを中止させた。

＊審判長及びメディカルは１組目の障害転倒案件の処理とその怪我人への対応中だった。

（９）事例９…男子円盤投。Ｂゾーンで実施していた円盤投の選手が、コーチングボックスへの移動中に水壕に落ちる事案が２件発生（雨天で視界が悪く、さらに傘をさして移動していため見えなかった様子）

⇒ 水壕の周囲をコーンとバーで区画した。

６．終わりに

北海道らしからぬ酷暑の中、日本高校新記録１を含む８つの大会新記録が誕生し、成功裏に大会を終えることができました。インターハイに向けて道内の審判員が競技運営・審判業務を改善し、これまでできなかったことを新たに取り入れ、各部署で主任を中心としたチームワークと部署間の連携を構築できたことは、大きな経験と財産になりました。今後の全国規模大会にさらに活かせるように、インターハイの経験を引き継いでいきたいと思います。

2023年度　全国競技運営責任者会議における報告

2024年1月25日

（一財）愛媛陸上競技協会理事　　織田　英毅
（2023全中大会総務部長）

1.　大会名

第５０回全日本中学校陸上競技選手権大会

2.　主な内容

(1) 大会前の準備について

○　県中体連陸上競技専門部長が４月の人事異動に伴い、現場を離れるという緊急事態が発生したが、県中体連陸上競技専門部が一丸となって取り組む体制を整えることができた。

○　日本中体連、日本陸上競技連盟と連絡を取り合いながら準備を進めることができた。

○　新型コロナウィルス感染症の５類移行に伴い、これまでの対策からかなり緩和した大会運営を計画した。一般的な感染対策を実施した上で、極力コロナ前の状態に戻した大会運営を心掛けた。

○　大会の審判については、愛媛陸協の審判部に依頼し、１年前から調査を開始して円滑な審判運営を目指した。U18・16大会も継続して実施していることから、全国大会の審判・競技運営については大きな心配はなかった。

○　協力役員については、数を絞って依頼をかけた。本県は陸上以外に４つの競技を実施し、松山市で陸上競技を含めて４つの大会運営をするという極めて困難な状況であったが、小体連の先生方の協力も得て、何とか人員を確保することができた。

○　施設・会場については、バレーボール競技との日程重複があって大変であったが、関係機関や業者との連絡・連携によって大きな問題はなかった。

○　諸物価値上がりの折、今年から参加料を増額していただいたことは、大会運営にとっては大変ありがたかった。今後も、経費削減など、できるだけ簡素化した大会運営をしていく必要があると感じた。

○　申込方法については、日本陸連のエントリーシステムと、従来の方法との併用とした。その結果として、大きなトラブルはなく、資格審査はかなり簡略化されたように思われる。

(2) 大会期間中について（問題点とその解決方法等、今後の課題）

【日程等について】

○　大会期間が例年よりも若干遅かったことや、バレーボール競技との重なりがあり、様々な問題があったが、関係機関のご理解・ご協力によって何とか無事に終えることができた。

○　スポーツ庁の開会式参列があり、細かな日程が直前まで分からないことが一部の役員には負担をかけてしまった。

【審判・競技運営について】

○　審判については、愛媛陸協にお世話になった。大きなトラブルもなく、全国大会に慣れていることで安心感があった。

○　男子3000m予選のナイターレースの実施や、給水については熱中症対策として効果的であった。

○　砲丸投については、公平性の観点から１ピットでの一発決勝であったため、時間がかなりかかってしまった。投てき審判員からは、予選ラウンドを設けても良いのではという意見もあった。

○　今大会は、Ａ決勝・Ｂ決勝から、「決勝」「トライアルレース(TR)」という表現に変更した。ただ、参加者や運営サイドのからは「予選→準決勝→決勝」の方が良いという意見もあった。組数が多くなると、風によっての有利・不利がどうしても生じる。今後、全中は縮小の方向にあると聞くが、いろいろな意見をもとに検討していく必要があると思われる。

○　仕方ないことであるが、申込参加者数によって、タイムテーブルが大きく変わる場合がある。今回は、男子800mが多かった。

○　本県の会場は、「各県テント-練習会場-招集場-陸上競技場」の動線が非常にコンパクトで移動距離が短いことは、選手にとっては良かったと思う。練習会場等での大きなトラブルはなかったが、表示（掲示物）をもう少し分かりやすくすれば良かったと反省している。

○　スタンド内の移動について様々な規制を設けたが、一部参加者の勝手な行為があったのは残念である。

【気象・コンデション・医療体制当について】

○　今大会は暑さというより、「雷雨」特に雷に悩まされた。前日練習時から、不順な天候状態が続き、様々な対応を考えた。日本中体連・日本陸連・愛媛陸協等のご指導のおかげで、無事に大会を終えることができた。

○　養護教諭７人と医師という救護体制は好評であった。担当役員と養護教諭、医師との連携が密にとれており、安心して運営できた。熱中症による救急車を１回呼んだが、大事には至らなかった。

3.　終わりに

本県にとって、41年ぶりの全日中を終えて、様々な方々への感謝の気持ちを表したいと思う。現在、中学生というジュニア期の子供たちは、少子化、部活動の地域移行、教職員の働き方改革等、様々な課題に直面している。今後の全国大会運営についても、様々な意見があると承知している。しかし、陸上競技が大好きな子供たちの夢を具現化するためにも、現場の意見（今後は中学校だけでなく、クラブの意見も）と日本中体連、日本陸連のご指導の下、努力していくことが大切である。

大会にご尽力くださった皆様、本当にありがとうございました。

燃ゆる感動　かごしま国体　特別国民体育大会　報告書

（一財）鹿児島陸上競技協会

1. 開催期日：2023年10月13日(金)～17日(火)
2. 会場　　：白波スタジアム（県立鴨池陸上競技場）
3. 実施種目：男子28種目 女子27種目 男女混合1種目 計56種目
4. 新記録　：U20日本新記録2　　日本中学新記録1　　大会新記録28　大会タイ記録4

※詳細はhttps://www.jaaf.or.jp/files/competition/document/1779-7.pdf

5. 抗議事例等

・成年男子100m予選において，1レーンと2レーンの選手が不正スタートで同時に失格となる。

2レーンの選手から「1レーンの選手につられて反応したが，スタートは切っていない，ブロックに加圧されたのみ。」との抗議がなされるが，リアクションタイム，波形，ビデオの確認等から審判長は失格の回答。その後上訴となるが，ジュリーの判断も抗議棄却となった。

・成年女子800m予選において，選手が転倒した。

転倒した選手より，「2周目に入った際，前方の選手が突然前に出てきて転倒することになった。」との抗議がなされる。審判長よりビデオ監察の結果，レースの流れの中で，前の選手に接触して転倒したと判定して救済はしない，としたが，該当県より上訴。「「前の選手が急に横に出たのではない」とあるが，本県のビデオでは急に横に出たと判断できる。本県の選手は，転倒や接触を回避することは不可能であった。前の選手の行為が故意でなくとも，確実に不利益を被った。」とのこと。結果ジュリーが救済の判断。1レーンに2名入れて決勝を実施。（白波スタジアムは8レーン仕様）

・成年男子110mH予選において，7レーンの選手より，8レーンの選手が転倒して，そのハードルが7レーンに進入してきて不利益をうけた，と抗議あり。ビデオ等参考にして，不利益が認められたため，再レース（該当選手のみ）を計画（救済による決勝進出は行わず）。選手から再レース辞退の連絡があったため当初の結果を採用した（抗議取り下げ）。

・男女混合1600mR予選において，2走から3走においてコーナートップ通りに並ばなかったチームAがあったためAを失格とした。「割り込まれたため不利益を受けた」と抗議してきたチームBについては，タイムロスは無かったとの判断をして救済等は行わない，とした（審判長）。その後，失格となったAより，整列は競技役員の指示によるもの，選手には責任がない，と抗議が入る。対して審判員のミスは考えられない，出発係も正しい順序を指示している。状況をJTOも現場で確認している。ビデオでも確認できるため，失格は撤回しない（審判長）とした。これに対して「的確な指示をされず，本人は迷い前走者が近づき，空いているスペースがなく戸惑った。明確な誘導なく，審判が順番通り並んでいることを確認しなかった。誘導指示も遅い，明らかに運営ミス。 」とAより上訴が入る。ジュリーの判断は「上訴を認める」となったため，結果を訂正。決勝進出（決勝番組）も訂正。Aは決勝進出。再度Bより抗議。「Aが正しく整列していたら，Bはもっと良い記録だったはず，よって救済すべき。」これを審判長は棄却。上訴されるが，ジュリーも棄却。またAが失格が訂正されることにより決勝進出になったことを受け，当初決勝進出として発表されたCが訂正により予選敗退となった。これに対してCが抗議してきたが，結果

が変わらないことを伝えて抗議を棄却した。また決勝番組が数回変わったことによりレーンがその都度変更になったことを受け，チームDが「レーンを最初の発表時にすべき」と抗議。番組編成はその都度ルールに沿って一部ランダム編成を行っていることから，最新のものを採用する（審判長）と抗議を棄却。

・女子共通400mR決勝において，2走から3走においてオーバーゾーンとして失格となったチームから，「オーバーはしていない」と抗議が入る。ビデオ観察よりオーバーが確認できる。目視していた観察もオーバーを確認している，とのことから抗議を棄却（審判長）。「ビデオの角度及び審判の角度からは，バトンの位置・手を離したタイミングは正確に確認できないのではないか。むしろ，後ろから見た角度ではゾーン内で手を放している。」と該当県より上訴が入る。ジュリーの判断は「審判長の裁定を支持」ということで上訴を棄却。

6. 反省等雑感

公式練習日に鹿児島でも久し振りの桜島による大量の降灰が見られた。慣れない他県の方々は驚き，対応にも追われたと思う。競技が始まってからは降灰が収まり無事運営できた。白波スタジアムには珍しく風のコンディションも良く，天候にも恵まれたこともあり，好記録が多数見られた。

大会を迎えるにあたっては，2020年開催がコロナ禍で延期となり，2023年開催が決まったが，当初から競技場の改修・投てき練習場の確保等に苦慮していた。準備期間も含めて10年余りの間に，役員の変更や，開催を前にご勇退される役員の方々もおり，特別な思いでこの大会を迎えた。

五日間，各部署の主任を中心に，多くの役員・補助員が献身的に業務を遂行してくれた。各都道府県の関係者からも，「気持ちよく競技ができた」「素晴らしい運営だった」など感謝のお言葉をいただけた。

良かった点として，各都道府県からの要望にスムーズに対応できた（コーチ席の位置変更・多種目同時届を提出した選手への対応・TICの対応など）。また補助員の動き（準備や清掃など）や，音響，サブトラックにおけるハードルの設置方法など，各都道府県から評判がよかった。そして，大会中，日本陸連・鹿児島陸協・各都道府県監督(庶務等)とLINEグループによる連絡の共有を行った。これが比較的好評で，連絡事項の正確な伝達へと繋がった。またこれまで紙で行っていた記録配布について，希望の都道府県のみ行うとしたが，希望してきたのは1県だけであった。

一方で運営の中で細かいミスや連携不足等があったり，盗撮への対応に追われたり，スタンドの応援席が少ないため，通路での立ち見が多くなった時間帯があったことへの対応などが今後の課題として残った。

また準備段階での課題として，資格審査・番組編成が非常に大変であった。陸連登録システムや陸マガ記録システムがシステム移行や担当者変更により，データの紐付けや更新がうまくいっておらず，データの確認や記録の確認が非常に困難であった。より公平で正確な番組編成を行うためにも，今後システムを整備して欲しい。また申込締切を遅れる都道府県もあり，編成が遅延する原因になった。